

福井市の公民館のあゆみ（その3）

5. 昭和40年代の福井市の公民館活動（活性化かつ充実の時代）

昭和39年 不死鳥のねがい（福井市市民憲章）制定

災禍の中から早期の復興を成し遂げた「不屈の精神」と燃える「郷土愛」を精神的な支柱として、名称を「不死鳥のねがい」とし、副題を「福井市市民憲章」とする市民憲章が制定された。

公民館は市民憲章推進協議会の支部となり、市民憲章を公德心の高揚に努力するための手段としてその普及活動に奔走した。昭和43年の国体を控え、市民憲章の推進は公民館の大きな役割であった。市民の福井国体への関心と熱意は大きく、社会教育・公民館運動にも総ぐるみ・総参加を合言葉に組織化が強調された。団結力・組織化は公民館活動から生まれた時代であった。

地域の活動は、団体が中心となり公民館職員はその一員となって展開してきた。昭和40年から50年代は周辺部の町村の合併がさらに進み、小学校区単位の地区公民館が増加し、独立公民館の建設が相次いだ。

昭和47年 あたご・不死鳥ブロックの10館で主事が2名体制になる

昭和49年 福井市公民館職員体制整備計画発表

出張所（支所）職員に公民館職員の兼務辞令を発令

職員体制を整備し適正かつ効果的な公民館活動の促進を図るため、福井市公民館職員体制整備計画が発表され、出張所職員が公民館業務も担う兼務辞令が発令された。

公民館における事務処理が明確化され、職員体制や待遇についても段階的に改善されていった。公民館活動も地域に沿った課題やテーマを取り上げるようになり、公民館にとって活性化・かつ充実した時代となっていった。

6. 昭和50年代の公民館と地域活動（生涯学習の中核を担う）

昭和46年4月 社会教育審議会答申「急激な社会構造の変化に対処する社会教育のあり方について」

昭和56年6月 中央教育審議会答申「生涯教育について」が出される

昭和40年にユネスコのポール・ラングランによって提起された「生涯教育」の考え方は、日本にも広く紹介されるようになった。昭和46年の社会教育審議会答申「急激な社会構造の変化に対処する社会教育のあり方について」においても、生涯教育に果たす社会教育の役割が強調され、その中で公民館の新たな意義も提起されている。さらに、昭和56年6月に、中央教育審議会答申「生涯教育について」が出され国の生涯学習政策が本格化していった。

社会教育という言葉から生涯学習という言葉が、新しいものとして公民館活動の中に出てくるようになったが、生涯学習の中核をなすものは公民館であり、公民館活動に大きな変化はなく、各種学習活動のほかに、地域活動として体育祭や歩こう会、民謡大会、敬老会、文化祭、かるた会、年賀会など、地域全体の活動を支えてきた。また、リーダー研修や地域づくり事業など、公民館に求められる地域の人たちの要望も多種多様となり、公民館職員の仕事はますます多岐にわたるものとなってきた。

地域づくりの活動を展開するには、公民館と団体との連携が不可欠であるが、昭和50年代に入ると地域行事の中核をなしてきた青年団活動が低調化し、組織として残って活動している地域が少なくなってきた。既存の団体は自治会や老人会・婦人会、後は目的団体となっていった。そこで、これからの地域を活性化し、地域づくりの中核となる団体として壮年会の組織づくりが行政主導ですすめられ、公民館の働きかけで半数程度の地区で結成をみた。

昭和52年 順化公民館が優良公民館として文部大臣表彰を受ける

福井市の公民館としては初めての受賞であり、20年あまりにわたる公民館行政の努力の結果として記録されている。各種スポーツ大会、市政懇談会、若者のための教養セミナー、親子社会奉仕、納涼民謡大会、年賀会、地区公民館まつり、各種学級講座の開催など、地域活動の拠点として、各種趣味・教養習得の場としての活動と、婦人リーダー養成講座、子どもリーダー研修会、各コースに分かれた中央婦人学園や母親学級など中央公民館としての役割も含めた公民館活動が評価されたものであった。